

別紙2

演題 「リスクのアジェンダ・セッティングー誰が、如何にリスクを語るのか」

神里 達博

近年、日本では営々と積み重ねられてきた信頼が崩壊する事件が多発してきた。地震や洪水、ダイオキシンやアスベスト、新興感染症、鉄道事故、耐震偽装、消えた年金など、あらゆるシーンで「昭和の神話」が壊れていった。しかし、これらのイシューは、いかなるプロセスを経て社会問題化されてきたのだろうか。そしてメディア、行政、大学といった制度は、そこでどういう役割を果たしたのか。いくつかの具体的な事件を例に、我々の社会における「リスクの議題化」のシーンに光を当ててみたい。

プロフィール

科学史・科学論の視点から、リスク社会を読み解く仕事を続けている。元々は医療・環境系を研究対象としていたが、近年は技術の問題にも関心を広げている。

東京大学大学院工学系研究科特任准教授。早稲田大学及び東京工業大学非常勤講師。東京大学工学部化学工学科卒(1992)。旧科学技術庁（行政職）、(株)三菱化学生命科学研究所、JST 社会技術研究開発センターを経て現職。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学（2002、科学史・科学哲学）。

主著に『食品リスクーBSE とモダニティ』（弘文堂、2005）、朝日新聞「論壇時評」合評委員（2006-2008）、科学技術社会論学会・編集委員（2008-）

